

目次 ▶教育委員コラム …… P1
 ▶SHINAGAWA ICT SYMPOSIUM の開催 …… P2
 ▶区立学校におけるタブレットの活用状況 …… P2
 ▶難聴通級指導学級の移設 …… P3
 ▶学校支援チーム[HEARTS]の活動 …… P3
 ▶ティーンズ書評バトル2022を開催しました …… P4



- ▶品川図書館の案内サインが新しくなります …… P4
- ▶「まもるっち」を貸与しています …… P4
- ▶83運動にご協力ください …… P4
- ▶学校改築を推進しています …… P5
- ▶児童・生徒教育長表彰の実施 …… P6
- ▶教育長杯 各スポーツ大会の結果 …… P6



教育委員 コラム

子どもの品格

品川区教育委員会 教育委員 吉村 潔



以前、新聞に次のような投書がありました。

小学3年生の孫娘が給食当番の時、クラス全員の分のサラダ用のドレッシングを過ってこぼしてしまいました。

何もかけないサラダを食べ始めた級友の間から「おいしくない」「全然味がしない」などと不満の声ががり始め、孫娘もどうしたらよいのかわからず、泣きたくなったそうです。

その時、ひとりの男の子が「僕も給食当番の時に間違えてタレをこぼしちゃって、何もつけないで食べたことがあるよ」と言ってくれたそうです。すると、あちこちであがっていた不満の声は止まりました。…(略)

この投書を読んだときに、思い浮かんだのが『子どもの品格』(高橋義雄著)という本でした。著者は、この本の中で「本来、子どもに品格という言葉を使うのは正しくない

いが、子どもであってもその年齢なりの常識やふるまいが求められる。そういったものが身に付いている子どもは『品格』や『気品』を感じさせる」と書いています。

小学校の教員時代、確かにそうした子どもたちをたくさん見てきました。言われたことだけでなく、いつも自分の考えを入れた取り組みをする子がいました。からかわれている友達をさりげなくその場から連れ出す子がいました。元気のなくなったザリガニを休み時間中じつと見つめている子もいました。集合時間に遅れ友達を待たせたときに「待っていてくれてありがとう」と言える子がいました。

子どもだからこそ、あるいは子どもであっても身に付けさせたいことがあります。

それでは、こうした子どもなりの品格や相手を思いやる気持ちをどのように育てたらよいのでしょうか。このことについても、私は

ある本から学びました。そこには次のような言葉がありました。

● 思いやりの気持ちは放っておいても育たない。

● 誰かが誰かを思いやっている姿を、子どもが日ごろから身近にたくさんみることがある。

● 子どもは、親のいうことをなかなか聞かない。けれども、親のしていることは学び、よくまねをする。

● できるだけ□でやる教育はさけて、心とかしぐさとか物腰、行動で教育することができれば、それはすばらしい。

(佐々木正美著『子どもへのまなざし』より)

子育てや学校教育では、子どもの周りにいる大人の存在が少なからず影響を与えます。人との比較ではなく、その子らしさを認める大人や友達の存在があれば、「品格」のある子は増えるのかなと思っています。

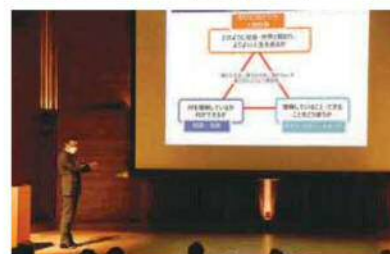
SHINAGAWA ICT SYMPOSIUMの開催

令和4年11月30日に、五反田文化センター音楽ホールにて開催された「SHINAGAWA ICT SYMPOSIUM」では、これまでの区におけるICTの活用について、3校の重点校による実践事例報告や基調講演、パネルディスカッションを行いました。

実践事例報告では、大井第一小学校、荏原第一中学校、八潮学園の先生から、各学校においてこれまで取り組んできた実践事例や、その成果と課題について発表がありました。各学校における活用の様子から、ICTを効果的に活用することにより、子どもの思考力や表現力等を育成するなど、日々の授業改善につながっている様子がわかりました。

パネルディスカッションでは、コーディネーターに、情報通信総合研究所の平井聡一郎氏をお招きし、講演した聖心女子大学の益川弘如教授、活用重点校の先生、保護者代表等をパネリストとして、

「ICTを活用した、品川の子どものたちの新しい学びについて」というテーマで、これまでの取組や



▲実践事例報告(大井第一小学校)

これからの方向性について話し合いました。当初は使ってみることに目標だったところから、現在は、区立学校教育要領で目指す資力・能力の育成や主体的・対話的で深い学びのある授業改善につなげていく活用へと変容してきています。今後は、さらに活用の質が求められるべく方向性について共有することができました。

これからも、未来を切り拓く子どもたちの育成に向け、重点校の取組をはじめとした各学校の実践について共有し、さらなるICT活用の推進を図っていきます。

区立学校におけるタブレットの活用状況

各学校では、タブレット端末が導入されてから現在までに、様々な場面での利用を図っています。

授業では、1年生から9年生まで学年・教科を問わず使用されています。低学年では撮った写真や映像に感想を書き込んだり吹き込んだりすることから始まり、学年が上がるにしたがって、クラウド型授業支援アプリを使って、提出された友達の見返りを見たり、それをもとに話し合ったりする活動が行われるなど、それぞれの学年に応じた活用を推進しています。



▲授業での様子
(英語・品川オンラインレッスンの様子)



▲校外学習での様子(エコルとごしにて)

撮影した動作を見直して技術の向上に生かすといった部活動や、委員会活動・児童生徒会活動における意見の集約や発表等に用いられています。

また、児童・生徒にとどまらず、教職員では、会議での資料配布、研究授業における協議、オンラインでの研修等に利用され、働き方改革の視点やペーパーレスといった環境への配慮など、その活用の幅を広げています。

今や教育現場では、タブレット端末は必要不可欠なツールになってきているといえます。



▲教員研修の様子(ICT推進担当教員研修)

難聴通級指導学級の移設

区では台場小学校（1～6年生）と豊葉の杜学園（7～9年生）に難聴通級指導学級（きこえの教室）を設置しています。

難聴通級指導学級とは、難聴により、主に補聴器や人工内耳を使っている児童・生徒が、自分のきこえの状態を理解し、聞き取りの力を伸ばし、心の安定や学習意欲を高めることを目標に授業を行っている通級制の学級です。

難聴通級指導学級においても、義務教育9年間の一貫した質の高い教育を推進するため、令和6年



▲難聴通級指導学級で使用しているオーディオメーター（聴力検査機器）

度に豊葉の杜学園（1～6年生）

に難聴通級指導学級を開設します。

それに伴い、台場小学校の難聴通級指導学級は令和7年度末まで移行期間として存続し、令和8年度に閉級する予定です。

移行にあたっては、対象の児童ならびに保護者に丁寧に説明し、関係学校とよく連絡を取り合って進めていきます。

今後も児童・生徒に寄り添い、発達や障害の状態に応じ、専門性の高い指導を行っていきます。



▲難聴通級指導学級の教室（台場小学校）

学校支援チーム

「HEARTS」の活動

学校支援チーム「HEARTS」（以下、ハーツ）は、区立学校在籍の子どもの支援のための専門家チームです。不登校やいじめ、暴力行為、非行、家庭環境などにより、子どもが学習に向かない状況になった時に、学校、家庭と共に解決に向けて一緒に考え、サポートしていきます。

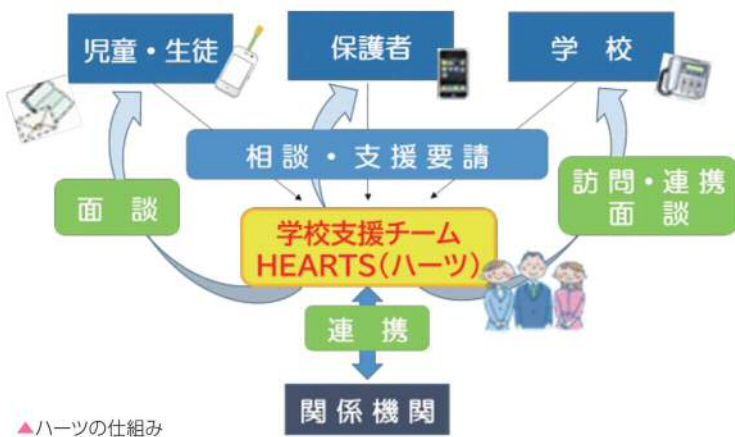
チームは、スクールソーシャルワーカー、心理相談員、元警察官、教育アドバイザー、指導主事の多職種で構成され、教育総合支援センターを拠点として活動しています。

ハーツは、児童・生徒、保護者、学校からの支援要請を受けた後、学校や家庭への訪問や相談者の来所により面談を行っています。

児童・生徒との面談では、遊びを通して関係づくりを行い、本人の気持ちを聴くなどカウンセリングを行うこともあります。また、相談者のサポートリソースを探し、他の支援機関をつなげるなど、関係機関と連携しながら支援を行っ

ています。

ハーツへの相談は、①相談専用電話②各区立学校に設置された目安箱③タブレット端末の「アイシグナル」（7～9年生対象）④まもるっちのハーツ相談電話（1～6年生対象）で受け付けています。



▲ハーツの仕組み



▲タブレット端末のトップ画面にあるアイシグナルアイコン